

研究論文

乳幼児のかみつきの実態と保育士の 対応方法に関する実証的研究

第一学院専門カレッジ

細 田 由 起 子

創価大学教育学部

戸 田 大 樹

国際学院埼玉短期大学

氏 家 博 子

要 約

本研究は、現代の子どものかみつきのにおける年齢や頻度、発生要因と同時に、かみつきのに対する保育士の対応方法を明らかにし、保育現場の実践に寄与する知を還元するための基礎的資料を得ることを目的としている。調査1の結果、かみつきの頻度は全体的に増加していないが、低年齢において増加傾向があることが認められた。また、1歳児2歳児では同じ子どもが何度かみついており、特に1歳児にその傾向が強いことが明らかになった。調査2の結果、かみつきの発生ピークは18カ月～28カ月頃であり、1日の午前の保育中に一番多くかみつきの発生していた。そして、かみつきの発生した際の保育士は、1歳児、2歳児でもほぼ同様になぜかんだのか理由を聞く、かんではいけないと注意するなどの対応をしていることが明らかになった。

I. はじめに

現在、幼稚園や保育所等の保育現場には障害のある子どもやアレルギーを抱える子どもへの対応など様々な問題がある。子どもに関する他の問題としては、他児をひっかく、たたく、蹴る、かみつくといった攻撃性が挙げられる。子どもの問題行

キーワード：乳幼児、かみつきの、保育士の対応方法

動のうち、かみつきの問題は以前にも増して保育所の悩みの種になっている。なぜなら、かみつきの行動は1歳児を集団で保育する際に見られる保育所特有の問題だからである。0歳、1歳、2歳は言葉の発達の途上にあり「自分の気持ちを言葉で表現することが不十分であるため、かみつきの自己防衛の一つである」との解釈（神田、2009）¹⁾がある。また、深谷（2002）²⁾によれば「かみつきの他、他のひっかく、たたくという攻撃行動と同様に扱われることが多い。しかし、どのような行為を攻撃行動とみなすかについての判断や定義は難しい」としている。このかみつきの行動をどのように理解してかわかるかについては、先行研究において細田（2003）³⁾の乳幼児のかみつきの捉え方の検討や杉下（2010）⁴⁾のかみつきの捉え方をどう捉えてかわかるか、などの研究が報告されている。

まず、子どものかみつきの行動は、深谷（2002）⁵⁾によれば「かみつきの行動は、非言語的コミュニケーションのひとつであり、非言語的コミュニケーションの最大の特徴は、状況依存性である。言語と違い、非言語的行為や表現は、送り手が置かれている具体的な現実状況でしか意味を持たない」と指摘している。西川・射場（2004）⁶⁾においては、言葉の発達に着目し、3歳前後でかみつきの行動が消失する理由として「自分の思いの表現方法として、言葉が話せるようになること」としている。ここでは、かみつきの行動を直接攻撃行動と結びつけず、自己表現の手段として広く捉え、さらに一般性の高い行動と見ている。次に、目的達成の手段（攻撃など）とする理解である。かみつきの行動を意図的行動として理解している神田（2009）⁷⁾によれば「1歳半位から友達との共有関係がとて楽しくなる時期となる。自我が芽生えた子どもたちは、自分の領域が侵されることに極めて敏感となり、貸して＝自分の領域が侵されることと感じ、譲り合う関係が成立しにくい。友達に関心を向けることはできても、どうすれば相手が喜んでくれるか十分にはわからず、攻撃行動に見えることがある。子どもの発達には、かみつきの可能性を作り出すが、かみつきの行動が生ずるためには、さらにプラスアルファの要因があるはずである」としている。また、藤岡・八木（1998）⁸⁾によれば「16カ月から2歳半の子どもたちは、自立の感覚を発達させる時期である。この頃の子どもたちは、個としての自分に目覚め自分自身のための物への欲求を持つようになる。おまけにこの子どもたちは、物や空間を共有することが極めて難しいという特徴を持っている」と述べている。このように、子どものかみつきの行動に複数の要因が重なっているにせよ、主要因は自分の欲求充足のための行動として、自己主張が強くなる時期に適切な言語などの行動様式が発達していない場合のアンバランスな状態の現れとみることができると考えられる。これ等の先行研究から、かみつきの行動は様々な視点から理解することができるが、保育士のように専門的知識を有しない保護者が理解をすることは困難と言えよう。

保護者の中には子どもを保育所へ入所させた後、初めてかみつきの行動について知る人が少なくない。多くの保育所では1歳児当初の懇談会などで子どもの発達段階の話をして、子どものかみつきの行動が今後の成長過程における姿であるということを周知し

ている。従来、かみつきは1, 2歳児には時々起こることとして保護者にある程度受け入れられていたが、今はそうではなくなった。この背景には、核家族化に伴って子育てに関する知識や経験が祖父母から後世に伝承されていない現実がある。その環境下で親になった保護者は正しい育児に関する知識が欠如している傾向にあるため、保育現場でかみつきなどが発生した場合、かみついた子とかまれた子の保護者と保育者との関係、かみついた側とかみつかれた側の保護者同士、子ども同士の関係も悪化する。また、保護者は保育者がきちんと対応してくれていたのかどうか不信感を抱くようになる。さらに、かみつきが原因で保育所を退所するという保護者が存在するという深刻な問題まで起きている。

これ等に加え、保育所を取り巻く環境の変化により、かみつきが発生しやすい外的条件が整ってきていることが懸念される。この点に関して、藤岡・八木（1994, 1998）^{9) 10)} は1181の事例検討を行った結果、かみつき行動の原因の一部は過密もしくは人的密度の濃さにあることを指摘している。保育状況との関連も指摘されており、「待機児ゼロ作戦」の一環として、面積基準内ならば子どもを何人でも入所可能にしたり、職員を非常勤で対応可能にするなど規制緩和が図られている（厚生労働省, 2001）¹¹⁾。このように、保育を取り巻く環境の変化はかみつく子の年齢や頻度、発生要因、保育者の対応方法に影響を及ぼしていることが推測される。このかみつきに関する研究は、保育現場での必要性から現在までにいくつか実施されてきたが、理論的研究も実用的研究も数少ない。以下に、いくつかのかみつきに関する研究を示す。

最新の研究としては、杉山・佐藤・前田（2015）¹²⁾ の1歳児クラスでのかみつきと0歳児保育との関連が報告されている。また、阿部（2004）¹³⁾ による3歳未満児の保育室の在り方に関する研究等がある。さらに、高橋（2000）¹⁴⁾ の乳児のかみつき行動への対応について、保育園における低年齢児のかみつき行動の実態把握に関する研究がある。藤岡・八木（1994, 1998）¹⁵⁾ によるかみつきの実態として、かみつきの臨界期については、17カ月～26カ月にピークがあり、その後減り続ける。しかし、45カ月を超えた子でも、2%から3%の出現率がある。発生の曜日では、月曜の発生が472事例中106件（22.5%）と群を抜いて多くなっている。ここでは、月曜日の子どもの不安定さが指摘されている。時間的発生状況では、午前中に8割近くが起きている。特に10時過ぎから11時に大きなピークがあり、昼食前後にかみつきの頻度が増加するため、子ども同士のトラブルも激しくなる。この時間は、保育者の目が行き届かないこと、また場面転換が目まぐるしく子どもの緊張感が高まること、子ども相互の密度の高さが緊迫感に感じられるのではないだろうかとしている。また、かみつき発生の場所として、藤岡・八木（1998）¹⁶⁾ の研究では、保育室全体で8割を占めている。園庭や戸外全体で1割弱となっており、ここでも空間・密度の問題を指摘している。かみつきの動機としては、物の取り合いや邪魔をされたからという原因が6割強を占めていることが明らかになっている。

次に、かみつきの理解及び保育者の対応方法に関連する研究である。藤岡・八木（1998）¹⁷⁾によれば「保育所でかみつきの頻発するのは、低年齢児の特性を十分把握しないまま、一律のプログラムのもとで、しかも過密な環境の中で子どもを保育しようとしているところに最大の原因がある」と述べている。責められるべきは、子どもでも保護者でもなく、保育プログラムだということになる。また、深谷（2002）¹⁸⁾は「子どもがどのようにしてかまなくなるのか答えが見つかるまでは、かみつきの起こる具体的な状況の記録やかみつきの止めさせることに成功した事例を集めることに意味がある。そして、子どもの年齢や事情に関わらず仲間にかみついてはいけないということを絶えず子どもに（時には親に）伝えることである。その上で子どもの気持ちを理解できる保育者になることは、一つの理想である」としている。さらに、西川（2009）¹⁹⁾は「かみつきの一番多い時間帯は、昼食の片づけから昼寝への切り替え時間ということに着目している。この時間の保育者の動きを整理して、子どものイライラを軽減するように保育を工夫するようにすること。また、一方で子どもは嫌なことがあってかむと思っていたが、楽しいことがないから、かんでいるのかもしれないと感じ、小グループで気持ちを十分通わせながら、遊んだり、食べたりして楽しいという思いをたくさん経験させてことが重要である」と指摘している。これと同様の見方として、神田（2009）²⁰⁾は「1歳は、自分で遊びを見つける力が不十分なので、保育者が手薄だったり、時間のすき間などにトラブルが多い。外へ出ると、興味をひく物が多いため、トラブルが減る」と指摘している。かみつきを他者への関心が高まり、友達関係の始まりと捉えているのは今井（2003）²¹⁾であり、『「一緒に遊びたい」「相手をしてほしい」「僕にも貸して」「そうじゃないのかなの」という思いでかみつきの始まっている。かみつきの困った行為と捉えず、友達関係の始まりとみて、周りの大人は双方の気持ちや要求を汲み取り代弁していくことが大切である』と指摘している。最近のかつき研究の動向として、菊地（2010）²²⁾によれば『保育者は、かつきが発生した時点で関わるため、実態記録は、かんだ、かまれたという目に見える状況がほとんどである。発生する前のかつきの理由、及びかつきを誘発する要因に関すること、かつき後の生活への影響については、ほとんど記述されていない。かつき後の双方の子どもの「痛み」「思い」を保育者は意識化し、なぜかつきになったのかということを考察し、次の保育につなげていく必要がある』と述べている。

このように、かつき研究は様々な角度から複数実施されているように思われるが、先行研究の数自体は大変少ない。かつきに関する先行研究が少ない根拠は、次のように考えられている。かみついていた子も、ある時期がくるとかまなくなるという臨界期があることである。また、かつき行動は一過性の行動と見られていることである。さらに、年齢が1歳近くに達したからと言って保育所にいる1歳児全員がかみつくわけではなく、ある特定の子どもにのみ見られる行動であり、かつきはクラス全体の子どもの間に広がるというような状態は見られないためであると考えられる。この

ような理由から、かみつきの研究は一定の終焉を迎え、かみつき問題の対応は保育者の力量に任せられているとも言えよう。ここに何よりも大きな保育上の問題があると考えられる。なぜなら、先に述べたように、現代の社会変化に伴う保護者の意識や環境の変化により、かみつきは今まで以上に深刻な事態を招いていると考えられるようになってきたからである。したがって、現在におけるかみつきの実態を明らかにすることは、保護者と保育者、保護者同士、子ども同士の信頼関係を維持することの意味をもつ。また、保育現場における保育の混乱を少しでも回避し、子どもの最善の利益を保証する点において意義深い。

以上を踏まえ、本研究では現代の子どものかみつきにおける年齢や頻度、発生要因、保育者の対応方法を明らかにし、保育現場の実践に寄与する知を還元するための基礎的資料を得ることを目的とする。また、本研究ではかみつき行動は低年齢児を集団で保育する際に見られる保育所特有の問題であると捉え、調査は幼稚園を除き保育所に限定する。

Ⅱ．調査Ⅰ

1. 調査対象

関東近郊の保育所146（認可保育所35、認可外保育所111園）を対象として質問紙調査を実施し、54保育所から回答を得た（回収率36.9％）。

2. 調査手順・時期

調査時期は平成22年3月である。調査手順は全保育所にかみつきについての質問紙調査を作成し、郵送による調査を行った。

3. 調査材料

質問紙

4. 調査内容

調査内容は西川（2009）²³⁾の研究及び藤岡・八木（1994, 1998）²⁴⁾の研究を参考にし、全体的なかみつく子の年齢と頻度、発生要因についてである。

5. 結果と考察

調査Ⅰでは、保育士のかみつく子の年齢と頻度、発生要因に関する意識を明らかにすることを目的とし、54保育所を調査対象とし、質問紙を回収して集計・分析を行った。

第1に、保育士のかみつく子の年齢と頻度に関する意識を明らかにするために、未回答を除く回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、保育士の

かみつく子の年齢と頻度に関する意識について（表1）、全体的に有意な差が見られた（ $\chi^2=12.92$, $df=6$, $p<.05$ ）。低年齢の時期からかみつきが「増加している」が有意に多く、「同じ」は有意に少なかった。「変化なし」については、「増加している」が有意に少なかった。「年齢が上がるも継続」と「その他」については、有意な差は認められなかった。このように、保育士の意識としてかみつきは低年齢の時期に増加していることが認められた。

第2に、保育士の保育環境である保育室の広さとかみつき発生の要因に関する意識を明らかにするために、未回答を除く回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、有意な差は認められなかった。この結果は、先行研究が指摘する空間的環境の影響を否定するものである。

第3に、保育士における0歳～5歳児のかみつき回数に関する意識を明らかにするために、未回答を除く回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、保育士における0歳～5歳児のかみつき回数に関する意識について（表2）、全体的に有意な差が見られた（ $\chi^2=66.12$, $df=15$, $p<.001$ ）。1歳児については、「5回以下」が有意に少なく、「6回～10回」と「16回以上」が有意に多かった。4歳児と5歳児については、ともに「5回以下」が有意に多く、「6回～10回」と「16回以上」が有意に少なかった。0歳児と2歳児、3歳児については、有意な差は認められなかった。すなわち、かみつきは1歳児をピークとし、以後徐々にコントロールされ減少していくものと推測することができる。

このように、子どものかみつく回数は年齢差により明らかな違いがあることが認められたが、0歳児と2歳児、3歳児、4歳児、5歳児のかみつきは5回以下が多く偶発的であり、1歳児は繰り返しが多いと推測される。つまり、1歳児のかみつきは特定の子どもの発達的な要因が強いと考えられる。

Ⅲ．調査2

1. 調査対象者

関東近郊の10保育所の保育士にかみつきの実態調査を依頼した。この10保育所はいずれも調査1の保育所には含まれていない。かみつきが発生した際に、1枚の質問調査表に記入してもらい、そのかみつきがどのような状況で起こったのか、その後の保育士の子どもへの対応などの記録を依頼した。また、かみつきの実態に関する事例作成は4名の保育士に依頼した。

2. 調査手順・時期

第1期：平成22年4月から6月である。調査手順は2保育所に直接行き、調査目的や調査方法、調査期間を説明し、許可を得て調査用紙を渡した。他の8保育所には、

電話で調査目的や調査方法、調査期間を説明し、許可を得て質問紙調査を実施した（回収率100%）。第2期：平成27年6月から8月である。調査手順は調査者が直接調査対象者である4名の保育者のもとへ行き、調査目的や調査方法、調査期間を説明し、許可を得て事例作成用紙を渡した（回収率100%）。

3. 調査材料

調査材料①西川(2004)²⁵⁾が実施した「かみつき」に関するアンケート内容を参考にし、保育者が記入することが負担にならないように質問紙を作成した。調査材料②子どもの日頃の様子からかみつきの対応まで、具体的にまとめるための事例作成用紙を作成した。

4. 調査内容

4-1. 質問紙の調査内容

- ①かみつきが発生した日時、天気、曜日、子どもの月齢
- ②かみつかれた子の月齢
- ③かみつきが発生した時の活動
- ④かみつきが発生した要因
- ⑤かんだ子はどの程度言葉で表現できるか
- ⑥かみつきが発生した時、保育士はどう対応したか
- ⑦自由記述（かみつきの起こる前やかんだ時の子どもの状態、クラスの状態、かんだ子の周りの子どもとのやり取り、かんだ子の表情やことばなど思い当たることや先生の気持など）

4-2. 事例作成用紙の内容

- ①対象児、②子どもの日頃の様子、③かみつき発生時の状況、④援助、⑤考察

5. 結果と考察

5-1. かみつきの実態について

調査2では保育所でかみつきが発生した日時や天気、活動、保育士の対応などを明らかにすることを目的とし、10保育所を調査対象として4月から6月の3ヶ月間にわたって発生したかみつき83事例を回収し、分析を行った。ここで得られたかみつきの実態に関する資料については、得られたデータが少数である点も含め、全て量的に統計処理することが適切であるとは言い難い。そこで、統計処理は行わずに得られた結果を保育学の視点から意味づけていく。

①かみつきが発生した日時、天気、曜日、子どもの月齢について

かみつきが発生した日時については、8時から12時までに1歳児は30件発生していたが午後は6件のみであり、午前中にかみつきがほぼ集中していた。一方、2歳児

は午前中15件、午後にも13件かみつきが発生していることが認められた。かみつきが発生した日の天気については総合計件数67件であり、そのうち1歳児の合計件数が39件であり、晴れ26件(66.7%)、曇り5件(12.8%)、雨8件(20.5%)、2歳児は合計件数28件であり、晴れ17件(60.7%)、曇り4件(14.3%)、雨7件(25.0%)であった。よって、かみつきは1歳児2歳児ともに晴れの日によく発生していることが認められた。曜日については、1歳児では月4件、火12件、水10件、木6件、金4件、土2件であり、2歳児では月8件、火3件、水7件、木3件、金3件、土5件であった。よって、1歳児では火曜日と水曜日が多く、2歳児では月曜日と水曜日にかみつきがよく発生していることが認められた。

②かみつかれた子の月齢について

かみつかれた子どもの月齢については、18カ月～28カ月頃がピークであった(表3)。

③かみつきが発生した時の活動について

1歳児と2歳児のかみつきがよく発生した活動については、ともに午前の保育中に一番多くかみつきが発生していた(表4)。

④かみつきが発生した要因について

1歳児は物や場所を他児から取ろうとした場合、2歳児は物や場所を取られると感じて防衛する場合にかみつきがよく見られた(表5)。

⑤かんだ子はどの程度言葉で表現できるかについて

他児をかみついた1・2歳児ともに単語がいくつか認識できる。または、保育士の簡単な指示に従っての行動が可能である程度の発達にあることが認められた(表6)。

5-2. 保育士のかみつきに対する対応方法について

⑥かみつきが発生した時、保育士はどう対応したかについて

1歳児、2歳児でもほぼ同様になぜかんだのか理由を聞く、かんではいけないと注意する、痛いことを知らせる、自分の気持ちを言葉で知らせるなどの対応(図1・2)をしていることが明らかになった。

⑦自由記述について

回答が得られた58名の記述の分析については、筆者と大学講師の2名で行った。その結果、発生状況の量的な分析結果を補足するための結果を質的に捉えることができた。まず、かみつきが発生する要因は発達的な状態による差異があること、子どもの側の内的状態と環境要因とが組み合わさることによって引き起きていること捉えられた。また、記述内容を2名でカテゴリー化し、からかみつきの状況の発達的な状態による差異を表すと見られる記述を「かみつきが接触行動の一種類であって、偶発的要因が強くかみつきの意味が理解できていない」「邪魔なものの排除、道具的行動の(物理的環境要因が強い)」「習慣化されてきて、よくないことが分かっているもやっってしまう(大人の目が意味を持ち、後の対応方法に配慮を要する)」「意識的な攻撃行動」「生

活の環境，雰囲気，行動モデルなどの影響で生活全体に問題がある」の5つに区分することが可能となった。

5-3. 事例作成用紙の内容

保育士がまとめた事例内容は資料1の通りである。この事例は，上記⑦の自由記述に比べ家庭と保育所という連続性を踏まえた子どもの様子から，保育士が子どものかみつきをどのように捉えて援助しているか，また，自身の援助の改善点まで踏み込んだ内容となっていることが示された。

このように，かみつきの実態が明らかになったが，保育士はかみつきの要因や子どもの発達状態に沿って対応を変えているのであろう。したがって，保育士がかみつきの発生状況や曜日などの視点，家庭での様子なども含め，総合的に個々の子どもを深く理解して対応していくことにより，かみつきの減少や繰り返しを防ぐことにつながると考えられる。

Ⅳ．総合的考察

本研究は保育所に在籍するかみつく子の年齢や頻度，発生要因，保育士の対応方法を明らかにし，保育現場の実践に寄与する知を還元するための基礎的資料を得ることを目的として実施した。

1. かみつく子の年齢や頻度，発生要因について（調査1）

調査1では，保育所に在籍するかみつく子の年齢や頻度，発生要因を明らかにすることを目的として調査を実施した。かみつきの頻度自体は保育士の意識として低年齢の時期において増加していることが認められた。また，0歳児から5歳児の間にかみつきの頻度の違いが数値的に認められた。つまり，かみつき頻度に視点を置いた場合，子どものかみつきについて視点を向けるべき年齢対象は，特に1歳児であることが分かる。この結果から，かみつく1歳児の子どもの特性として発達的問題と性格的問題などが関係していることが示唆された。

ここでの発達の・性格的問題としては，言葉の発達の遅れや攻撃性，忍耐力の欠如，情緒の不安定さなどの傾向があることが考えられる。低年齢児の発達のある特定の時期に，自我の芽生えや周囲への興味や関心，思考や行動力などの獲得を経るが，コミュニケーションの方法が未熟なため，周囲とうまく関わるができないなどの状態において，かみつき行動が抑制できない結果，かみつきは繰り返し発生すると考えられる。また，かみつきは保育所内で多発するため親の状況など，間接的要因の影響は弱いと考えられる。しかし，保護者のかみつきへの対応傾向は多様であり，保護者の日頃における対応の仕方のある種の結果が，間接的にかみつきの基盤を形成することも

考えられる。例えば、親のしつけ方も放任、厳格両方が含まれ、一般的なあり方よりも子どもの特性との関連で、子ども自身がどう受け止めているかがより重要であることが伺える。さらに、藤岡・八木（1994, 1998）²⁶⁾ が保育所におけるかみつき研究において、かみつきと空間の密度の問題を指摘していたが、本研究では同様の結果は得られなかった。

このように、かみつきの要因は複数あると考えられるが、保育の状況からかみつきが発生する状況は物的要因に加えて子どもの発達や性格などがあげられるため、要因そのものを特定化することは困難である。すなわち、保育所内においてある程度の集団で過ごす子ども同士においては、単に物理的な接触度だけでなく、心理的な要因も加わっていることも考えられるため、今後掘り下げて分析する手がかりが示されていると言えよう。

2. かみつきの発生要因と保育士の対応方法について（調査2）

（1）かみつきの発生要因について

調査2では、調査1で明らかになったかみつき頻度の多い1歳児、それに次いで発生の多い年齢の2歳児に焦点を当て、発達的な状態による原因の差異と対応方法への手がかりを得ることを目的とし、かみつきが発生した時間や活動などを通して発生時の環境条件の詳細を捉え、かみつきの発生要因と保育士の対応方法を検討した。結果、かみつき発生のピークは藤岡・八木（1994, 1998）²⁷⁾ の指摘とほぼ同様の18カ月～28カ月頃であり、発達の要因が強いことが明らかになった。この頃の子どもたちは、自分以外の子どもへの関心が出てきたり、自分の要求を押し通そうとする行動力が出てくる。そのため、他者との適切なかかわり方や行動のコントロールの仕方、コミュニケーションの方法が獲得できていないというアンバランスな状態であるため、子どもなりの解決方法としてかみつきが発生していると考えられる。かみつき発生の時間については、1歳児では午前中にかみつきが集中していたが、2歳児では午後にもかみつきが多く発生していた。ここでも、かみつきの要因が発達段階によって異なることが現れていると考えられる。天気については、1・2歳児ともに晴れの日にかみつきの割合が高い。しかし、一般的に雨の日など外で遊べないために子どもがイライラしてかみつきが発生すると考えられやすいが、今回の結果では晴れの日にかみつきが多く発生していることから関係性がないことが明らかである。そのような環境要因などの外発的要因よりも、子ども自身の特性などの発達の要因に起因していることがうかがえる。曜日については、1歳児では火曜日と水曜日、2歳児では月曜日と水曜日にかみつきが多く発生していたが、年齢と保育の時期によって子どもの状態が異なるため発生状況に違いがあると考えられる。よって、一律に「起こりやすい曜日」を決めることはできないであろう。かみつきが発生した時の活動は、西川（2004）²⁸⁾ の研究（2002年11月から2003年2月）では給食後から昼寝への切り替え時間に一番発生していた

が、今回の調査（2010年4月から6月）では1日の午前の保育中の時間帯が一番多くかみつきが発生していた。この結果については、時代に伴う社会変化による子どもの発達や親、保育環境の物理的変化などの影響なのではないだろうか。この点については、さらなる調査が求められる。かみつきが発生した要因としては、1歳児は物や場所を他児から取ろうとした場合、2歳児は物や場所を取られると感じて防衛する場合にかみつきが多く見られた。これは、低年齢児の自己防衛や言語能力の未発達さが関係していると考えられる。

（2）かみつきに対する保育士の対応方法について

かみつきが発生した際の保育士の対応については、1歳児、2歳児でもほぼ同様の対応をしており、なぜかんだのか理由を聞く、かんではいけないと注意する、痛いことを知らせる、自分の気持ちを言葉で知らせる、などに分散していることが認められた。保育士はかみつきの要因や子どもの発達状態に即して対応方法を変化させているのであろう。よって、かみついてしまった子ども一人ひとりの細かい発達の状態として、かむ意味が分からずかんでいるのか、かみつくことが悪いことだと理解しているが自己を抑えられずかんでいるのか、などをより詳細に理解して対応していくことが重要である。また、保育士は発達段階の視点に加え、保育士の自由記述から新たに得られたかみつきの発達の状態の差異「かみつきが接触行動の一種類であって、偶発的要因が強くかみつきの意味が理解できていない」「邪魔なものの排除、道具的行動の（物理的環境要因が強い）」「習慣化されてきて、よくないことが分かっているけどやってしまう（大人の目が意味を持ち、後の対応方法に配慮を要する）」「意識的な攻撃行動」「生活の環境、雰囲気、行動モデルなどの影響で、生活全体に問題がある」を踏まえ、より総合的に子どものかみつきの質を読み取って対応方法を検討・改善していくことにより、かみつきの減少や発生予防につながるであろう。

以上、本研究では、保育者の意識として低年齢児のかみつきの頻度が過去と比較して増加した点、かみつきがよく発生する際の活動等、先行研究の結果と違いが明らかになった点、保育士のかみつきを読み取るための新たな視点の獲得は、再びかみつきの研究を見直すための必要性を示せたのではないだろうか。また、本研究で得られた知見は、保護者と保育士、保護者同士の信頼関係を維持し、さらに、保育の混乱を回避するなど、保育現場の実践に寄与するだろう。

今後の課題は、冒頭で述べた通り、かみつきに関する研究は一定の終焉を迎え、かみつきの問題の対応は保育者の力量に任せられていると言えよう。しかし、社会変化の影響から現実的にかみつきを理由に保育所を退所する保護者の存在がいるなど、深刻な事態を招いていることは事実である。今後も資料1に示した記録のように、現場の保育士が考察まで含めて具体的にまとめたかみつきの事例研究を積み重ね、その知見を保育現場に提供していきたい。

引用文献

- 1) 神田英雄：保育に悩んだとき読む本 ひとなる書房，2009，101-121.
- 2) 深谷ベルタ：子どものかみつきを新しい観点から考えてみる 保育の実践と研究，7 (3)，2002，41-54.
- 3) 細田成子：乳幼児のかみつきの捉え方の検討 日本保育学会大会研究論文集，56，2003，86-87.
- 4) 杉下香織：かみつきをどう捉えてどうかわるか 保育の実践と研究，14 (4)，2010，26-29.
- 5) 前掲2)
- 6) 西川由紀子・射場美恵子：かみつきをなくすために－保育をどうみなおすか－ 保育と子育て 21，かもがわ出版，2004，52-80.
- 7) 前掲1)
- 8) 藤岡佐規子・八木義雄：集団保育における低年齢児のかみつきについて 日本保育園保健協議会 保育と保健，4 (1)，1998，34-38.
- 9) 藤岡佐規子・八木義雄：保育所におけるかみつきの研究 日本保健福祉学誌，1 (1)，1994 57-66.
- 10) 前掲8)
- 11) 厚生労働省 待機児童ゼロ作戦の推進について 雇児保発第35，2001，186-188.
- 12) 杉山弘子・佐藤由美子・前田有秀：保育所の1歳児クラスでのかみつきと0歳児保育との関連 尚絅学院大学紀要，70，2015，65-70.
- 13) 阿部和子：乳児保育再考Ⅵ—3歳未満児の保育室の在り方を考えるために— 日本保育学会大会研究論文集，57，2004，376-377.
- 14) 高橋美恵子：幼児のかみつき行動への対応について 日本保育学会大会研究論文集，53，2000，738-739.
- 15) 前掲8) 9)
- 16) 前掲8)
- 17) 前掲8)
- 18) 前掲2)
- 19) 西川由紀子：かみつきをなくすために part2 おとなの仲間づくりを考える，かもがわ出版，2009，8-39.
- 20) 前掲1)
- 21) 今井和子：知っておきたい！かみつき徹底研究 0・1・2歳児の保育 別冊幼児と保育，小学館，2003，13-36.
- 22) 菊地京子：保育場面における噛みつきの研究 (2) —かみつき場面における保育者

のかかわり― 日本保育学会大会研究論文集, 2010, 63, 76.

- 23) 前掲19)
- 24) 前掲8) 9)
- 25) 前掲6)
- 26) 前掲8) 9)
- 27) 前掲8) 9)
- 28) 前掲6)

謝辞

本論文の作成に当たり、千羽喜代子先生と関口はつ江先生に多大なご教示をいただいたことに深謝いたします。また、調査に協力いただいた保育所の方々にも深く感謝いたします。

付記

本論文は、細田由起子の修士論文を発展させたものである。また、本論文は、第34・35回国際幼児教育学会研究発表大会で一部発表したものである。

表1 かみつく子の年齢変化における保育士の意識 (n = 51)

増加	6 (60%)	3 (30%)	1 (10%)	0 (0%)	10
調整済残差	3.6	-2.7	0	-0.7	(100%)
同じ	3 (9.4%)	24 (75%)	4 (12.5%)	1 (3.1%)	32
調整済残差	-2.4	1.6	0.8	-0.4	(100%)
減少	1 (1.11%)	7 (77.8%)	0 (0%)	1 (1.11%)	9
調整済残差	0.7	0.8	-1.1	1.2	(100%)
合 計	10 (19.6%)	34 (66.7%)	5 (9.8%)	2 (3.9%)	51 (100%)

 $\chi^2=12.92$, $df=6$, $p<.05$

表2 保育所における0歳～5歳児のかみつき回数 (n = 54)

	年齢						合計
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	
5回以下	23 (69.7%)	18 (34.6%)	30 (65.2%)	29 (82.9%)	30 (100%)	30 (100%)	160
調整済残差	-0.2	-6.5	-0.9	1.7	3.8	3.8	(100%)
6～10回	2 (6.1%)	16 (30.8%)	9 (19.6%)	5 (14.3%)	0 (0%)	0 (0%)	32
調整済残差	-1.4	3.9	1.2	0.0	-2.4	-2.4	(100%)
11～15回	3 (9.1%)	4 (7.7%)	1 (2.2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	8
調整済残差	1.9	1.8	-0.6	-1.2	-1.1	-1.1	(100%)
16回以上	5 (15.2%)	14 (26.9%)	6 (13%)	1 (2.9%)	0 (0%)	0 (0%)	26
調整済残差	0.7	4.0	0.4	-1.7	-2.1	-2.1	(100%)
合 計	33 (100%)	52 (100%)	46 (100%)	35 (100%)	30 (100%)	30 (100%)	226 (100%)

 $\chi^2=66.12$, $df=15$, $p<.001$

表3 かみつかれた子の月齢 (n = 10)

月 齢	件数
12カ月	1
13カ月	3
14カ月	0
15カ月	0
16カ月	2
17カ月	0
18カ月	8
19カ月	0
20カ月	4
21カ月	3
22カ月	12
23カ月	8
24カ月	1
25カ月	1
26カ月	1
27カ月	10
28カ月	6
29カ月	1
30カ月	0
31カ月	3
32カ月	1
33カ月	2
34カ月	2
35カ月	1
合 計	70

表4 かみつぎが発生した時の活動 (n = 10)

かみつぎが発生した時の活動	1歳	2歳
登園から午前中の保育まで	6	4
午前の保育中	15	10
午前中の保育後から給食まで	4	2
給食中	1	0
給食から午睡まで	5	1
午睡中	0	1
午睡から午後のおやつまで	1	1
午後のおやつ中	0	0
午後のおやつから午後の保育まで	1	3
午後の保育中	3	4
午後5時以降	2	4
合 計	38	30

表5 かみつきが発生した時の要因 (n = 10)

かみつきが発生した時の要因	1歳	2歳
おもちゃなどの物を取ろうとした場合	8	6
おもちゃなどの物を独占したい場合	3	3
場所を取ろうとした場合	9	6
場所を独占したい場合	6	6
物や場所を取られると感じて防衛する場合	4	7
自分に近づいて来たことへの警戒心を抱いた場合	3	2
愛情表現の場合	2	0
理由が不明な場合	7	6
自分の思いが周囲に通らないでイライラした場合	5	1
登園前の家庭での問題があった場合	1	0
その他の場合	4	4
合 計	52	41

表6 かんだ子の言葉で自分の気持ちを表現できる程度 (n = 10)

かんだ子の言葉で自分の気持ちを表現できる程度	1歳	2歳
単語がいくつか認識できる	31	13
保育者の簡単な指示に従っての行動が可能	22	11
単語で意思表示が可能	15	6
ほとんど単語が出ない	9	4
言葉は出ないが体で表現が可能	3	2
2語文が出る	1	2
その他（言語的・発達の特徴など）	4	4
3語文が出る	0	0
日常会話が可能	0	0
合 計	85	42

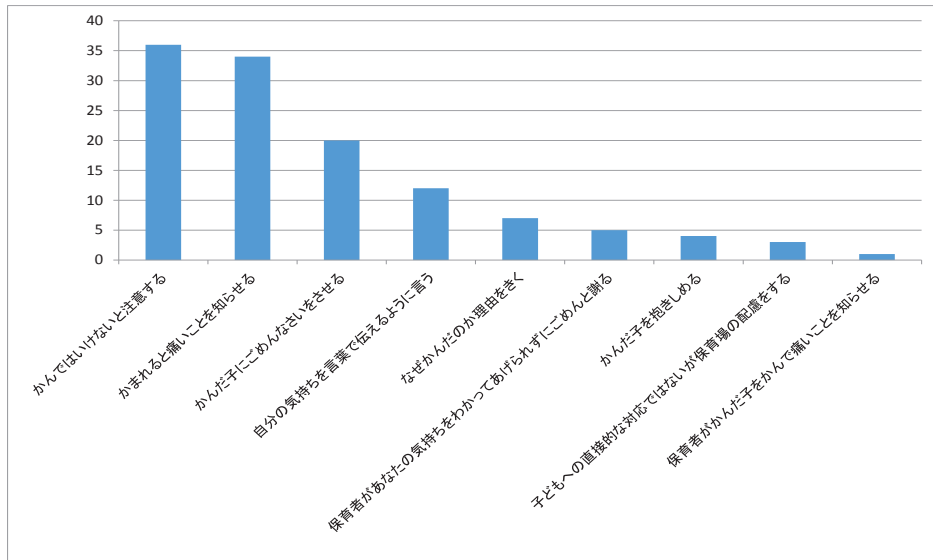


図1 1歳児がかみついた時の保育士の対応

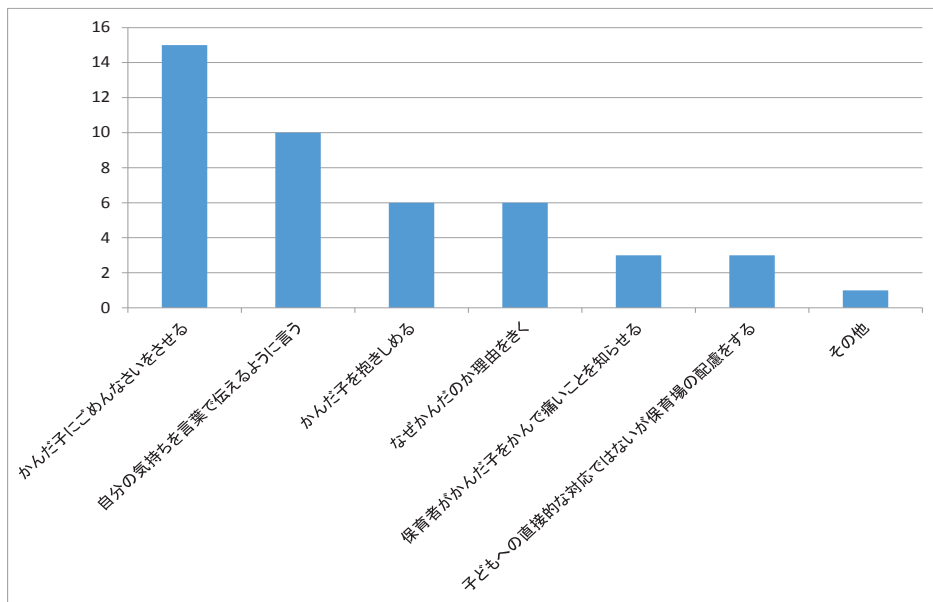


図2 2歳児がかみついた時の保育士の対応

資料1 保育士のかみつきに対する事例

事 例	
対 象 児	<ul style="list-style-type: none"> ・ かんだA子（1歳9カ月女児） ・ かまれたB男（2歳男児）
A子の日ごろの様子	母が第2子の妊娠中であり、父親は単身赴任のためほとんど家庭では母と二人で過ごしている。活発でいろいろなことに興味関心を持ち、積極的である。最近母のおながが大きくなってきて子どもなりに感じるところがあるようで、保育園では保育士に甘えたり、泣いたり、怒ったり感情の起伏が激しくなってきた。
B男の日ごろの様子	クラスの中では活発で、友だちと一緒に良く遊びかみつきはするがすぐ仲良くなる。保育士がかみついた時に注意すると謝ったり、悪かったというそぶりはする。発語が遅いわけではない。かみつきについて保護者に話しをすると、家ではかみつきはない様子。2ヶ月後に兄弟ができるとのことである。
かみつき発生時の状況	かんだA子が室内のままごとコーナーの洗い場で遊んでいる時、B男が楽しそうな様子に魅かれ小走りで近づいてくる。ままごとコーナーの洗い場は、子ども一人で遊ぶ位のスペース。二人になると狭い。B男がA子にぶつかった瞬間、A子がB男の腕にかみついた。保育士が間に入りA子とB男を離すが、A子がB男をたたこうと手足をバタバタしながら激しく泣き、その様子にB男は驚いていた。
援 助	B男のかみつかれた腕に氷と冷やしたタオルを当てて冷やす。A子はB男の状況を離れたところから見ていたので「遠いからかまないのよ」と話し、保育士と一緒に「ごめんね」と謝る。B男のかみつかれたところは5分ほど冷やし、看護師に診てもらう。保護者には直接状況を説明し、丁寧に謝る。A子B男双方の保護者に状況を話し、特にB男の保護者は、細かいことを気にする保護者のため配慮する。
考 察	A子の母親が現在妊娠中のこともあり、精神的に不安定な様子が見られる。小さいことで他児とのトラブルになりやすいことを保育士同士共通理解していた。特に、外遊びから入室した際や外に出られない日などは、注意をして見守っていた。なるべく保育士が近くにいて一緒に遊ぶようにしていたが、あっという間の出来事であった。子どもの行動範囲を束縛するのではなく、子どもが体を使って遊ぶようにしていく。かみついた後の保護者対応は、なるべく担任から直接状況説明をして謝罪するように心がけている。

The experimental study on the actual status of biting behavior in babies and little children and the methods of nursery teachers response

Yukiko Hosoda (Daiichi Gakuin College) ,

Daiki Toda (Faculty of Education Soka University) ,

Hiroko Ujiie (Kokusai Gakuin Saitama Junior College lecturer)

Abstract

The purpose of this study is to obtain basic data that can be summarized as knowledge to improve childcare practices by discovering the age and causes, current frequency of biting behavior in children, as well as the ways that nursery teachers respond to biting. The results of Survey 1 reveal no overall increase in biting frequency, but an increased tendency to bite at a younger age. We also found that among one- and two-year-olds, the same children bite repeatedly, and this tendency is particularly strong in one-year-olds. Survey 2 revealed that biting peaks at roughly 18 to 28 months of age, and that most biting occurs during times that involve morning childcare during the day. We also found that when bitten, nursery teachers ask both one- and two-year-olds why they bit in about the same manner, and respond by admonishing the child that biting is inappropriate.

Keywords : babies and little children, biting behavior, the methods of nursery teachers